

International Development Center of Japan
IDCJ 国際開発センター

開発コンサルタント“見習い”として働いて

私たち2人が開発コンサルタント“見習い”（正確には事務嘱託）として働き始めてから、早いものでもうじき1年が過ぎようとしています。本稿では、どういった経緯で私たちがIDCJを志望し、今何を感じながらこの業界で働いているのか、拙筆ながら述べさせていただきます。

専門性の幅を広げたい



私は大学で国際関係学を専攻し、タイへの交換留学をきっかけに国際協力分野での仕事を目指すようになりました。その後、大学院へ進学し国際開発学を学び、新卒で国際協力分野で働く道を探していたところ、IDCJのホームページを偶然見つけ、「開発コンサルタント見習いとしての3年間」という制度に興味を持ち、応募することにしました。

入社して研究職の方（以下、研究員）から様々なお話を伺う中で一つ意外に感じたことがあります。それは、現在の専門分野にたどり着いたのは、もともと大学で勉強していた分野に関連があるからというより、たまたま従事した案件がきっかけだったという研究員が多数いるということです。そういった意味

では、様々な分野の案件に関わり、将来の専門性について可能性を広げることができるこの3年間は、非常に貴重なものだと思います。自分にとって未知の分野でも、当社の過去のプロポーザルや報告書を読むことができ、さらには研究員から生の声を聞けるなど、知見を広げるには非常に良い環境ではないでしょうか。

また、事務職としてプロジェクトに関わる中で、限られた時間、予算、人員の中、プロジェクトが実際にどう動いているのかを知ることができるのは貴重な経験です。専門知識を現場で生かせるように応用する方法や、分野によるアプローチの違いなどを知ることができるのは、大学や大学院では決して得ることができない、“現場”ならではの利点だと思います。

IDCJの3年を終えた後、どの道に進むかについては不確定な部分が多くありますが、様々な人や分野との出逢いを大切にしつつ、将来開発コンサルタントとなるための経験を積んでいきたいと考えています。

（文責：国際開発センター 事務職員 渡邊 聖也）

経験豊富な先輩に学ぶ



「新卒で国際協力の仕事に携わりたい」。そんな風に考えている学部生の方は意外と多いように思います。残念ながら新卒で飛び込みたいと思っても、実務経験と高い専門性を持った「即戦力」の採用が主なこの業界の中で、開発コンサル“見習い”として新卒の採用を毎年実施しているIDCJと巡り合えたことは、私にとってラッキーなことでした。

IDCJで働き始めてもうすぐ1年になりますが、ここで働くことの一番のメリットは、第一線で働いている開発コンサルタントとの距離が、物理的にも心理的にも近いということだと感じ

ています。IDCJでは事務職も研究職（いわゆる開発コンサルタント）も基本的に同じフロアで働いているため、過去に提出されたプロポーザルを読んで疑問に思う事があれば、執筆者本人にすぐに話を聞きに行けます（その方が海外に出張中でなければ、ですが）。経験豊富なコンサルタント（研究職）から、一般の人がお金を払ってまで聞きたいと思うような話を気軽に聞くことができるというのは、IDCJのこの制度ならではの特典ではないでしょうか。

実を言うと私自身は、この3年間が終わってから開発業界に戻ってくるかどうか、まだ定かではありません。ただ、開発業界で働きたいと考えている学部生の皆さまにとって、IDCJがその思いに応えてくれる貴重な存在であることは間違いなく、今後読者の皆さまの中から、縁あって私と同じようにIDCJで“見習い”をされる方が生まれることを楽しみにしています。

（文責：国際開発センター 事務職員 岩崎 駿）